真・恋姫†無双

虚無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双

【Ｎコード】
Ｎ９１４８Ｘ

【作者名】
虚無

【あらすじ】
目指すのは、途切れず完結！

謝罪

真に勝手ながら内容を少々変えさせていただきます

元々は恋姫～まじこいSといった流れを予定していたのですが

まじこいSを早く書きたいがために恋姫を手早く終わらそうとした

ために色々省いたり手を抜いたりしてしまいました

次は省略せずに遅くても丁寧に書けたらと思います

小説そのものを消すわけではございませんので、機会があれば見て

ください

優柔不断で申し訳ございません

紹介（前書き）

リニューアルです！！

焦らず、じっくりやります

紹介

【簡単な】
本編の恋姫では普通に横文字があります

（名・桜十（おうとお））
（名と字は捨て子だからありません）

（異名・白黒）

【性格】
本編で

【容姿】
髪は髪のボサボサで身長は１８５ｃｍ

顔は皆さんにお任せ

服は真っ黒い二年後のゾロの服でるろうに剣心の比古清十郎の白外套を羽織ってる

【武器】
（黒刀・秋水）
（黒刀・月詠）

【戦闘方法】
基本的には一刀流だが二刀流も完璧に使え、状況によって使い分ける。ゾロが三刀流で使う技や飛天御剣流を二刀流で使う

【備考】
・老人に徹底的に鍛え上げられて得た身体能力
・風流
・見聞色の覇気と武装色の覇気と覇王色の覇気
・飛天御剣流
・町長から教わった月歩と縮地と月歩を合わせた技、剃刀
・風流と飛天御剣流の二代目

（名・？？）
（字・？？）（真名・？？）（自称＆通称・老人）

【容姿】
アニメのるろうに剣心・星霜編の比古清十郎

【備考】
・本編では桜十が使える剣技を全て独自で編み出した
・本来なら知れ渡って当然の強さだが知れ渡ってない
・風流と飛天御剣流の開祖で初代

【風流】・ワンピースに出てきた全ての剣士の技と嵐脚の派生（凱鳥など）の総称

【飛天御剣流】
・習わしは無い
・縮地も御剣流の一つ

プロローグ（前書き）

目指せ完結！！

プロローグ

ここは幽州の山の中の最も深い場所、そこには小さな小屋がある

その小屋の側には文字が刻まれた石が立てられていて、その前には白い外套をなびかせながら黒い服を着て、二つの刀を腰にした青年が立っていた

～桜十～

「こことも お別れか…」

おれは自分が育った小屋を見上げる

なんでもおれは捨て子らしく、山を下りて街に行ってる最中に赤ん坊のおれを見つけたらしい。どうやって赤ん坊のおれを育てたのかと聞いたら、「そんなことを聞く暇があったら修業しろ！！」と怒鳴られた。まあ時間が経てばそれも忘れていったが

生きていくには知識と力が必要と言われ、有無言わず叩き込まれた。知識は言わずもがな、力は賊がいるからだ

その老人が今から一年前に死んだ、最期まで変わらず笑いながら。思えばおれを色んな所に連れ出し、色んなことを叩き込んでくれたおかげで人とも普通に話せるし躊躇なく人を殺せる…その度に色々言われたが。亡くなる前に老人が持っていた二つの刀と白外套と今まで殲滅した賊の住処から奪って今まで蓄えていた莫大なお金をくれた。これで路銀に困ることはないから非常にありがたい

ここ数年、黄巾党なる連中は、蒼天すでに死す、黄天まさに立つべし，とか謳って各地の街を襲ってるとか。特徴は体のどこかに必ず黄色の布をしてるらしい。そういやこの一年間でこの山を住処にした連中は全員黄色の布をしてたな、まぁどうでもいいが

「……遺言どおりに行くか。…またな、老人、平和になったら戻ってくる」

遺言ってのは「この一年間は山に住んで白外套を羽織って二つの刀を腰にしても万全に戦えるための修業しろ、賊がこの山を住処にするたびに修業の成果として殲滅しろ、この一年が過ぎれば後は好きに生きろ」だ

墓石に背を向けると振り返ることなく賊の住処まで行く

…

…

？視点

私の名は趙雲、字は子龍だ

私は自分に相応しい主を求めて旅をしている

道中、程立と戯志才と出会い、旅を共にしてる内に打ち解けて今では真名で呼び合う仲だ。ちなみに程立と戯志才は偽名で、程立は程イクで真名は風、戯志才は郭嘉で真名は稟

私達三人は路銀が尽きかけてたため、幽州の公孫賛殿の下で客将をしてる

街に入ると結構活気づいていたからどのような御仁かと思ったら…
……極々普通だった。普通をこそが特徴の普通の人だった

そして今現在私と風は山を住処にした賊を討伐するために来ている。
……むっ……洞窟、……あれか……？

「風、賊が住処にしてるのはあの洞窟だと思うか？」

「ぐぅ～「起きろ！」おぉ…！、ん～、たぶんそうだと思いますよぉ～」

ふむ、……ここは…進んだ方が良いだろうか、それとも待ち伏せするか……

「風、どうする？」

「そうですねぇ、突き進んで迷ったら意味無いですからねぇ」

「なら、待ち伏せるか…」

「そうしましょう～」

そうと決まると、草陰に隠れようとする私と風

《コツ、コツ》

「「っ！」」

洞窟の中から響いて聞こえる一つの足音、風は急いで隠れて私は槍を構える

…

…

～第三者～

洞窟から出てきたのは白い外套を羽織った長身の男、桜十だ

「っ！！、（あの男、…かなり強い！）」

趙雲は知らず知らず冷や汗を流して手に力を込める

「…おまえ、…洞窟の賊を討ちに来たのか？」

親指でクイッと自分の後ろの洞窟を指差す

「…ならば何だ」

「いやぁなに、…二つほど言いたい、まず一つはおれは賊じゃない」

「……どうやら、真のようだな」

測るように見て、賊じゃないとわかって槍を控える趙雲

「誤解が解けてよかった、二つ目は洞窟の中の賊はおれが始末した」

「……そうか、貴殿ほどの猛者なら納得だ」

「ああ、連れを隠さなくてもいい」

「……風、出てきても大丈夫だ」

連れ（程立）がいると見抜かれたことに驚くことなく、趙雲が風を呼ぶ

「…まさか、見抜かれてるとは思いませんでしたねぇ～」

「気配を隠し切れてなかったからな」

「そうでしたかぁ～」

何とも気の抜ける様な口調の程立

「……おまえたちは？」

「おっと挨拶が遅れましたな、私は趙雲、字は子龍」

「風は程立です～」

「おれは桜十だ、よろしくな、趙雲、程立」

「こちらこそ（よろしくです～）」

挨拶を交わす三人

「桜十殿「呼び捨てで構わんさ」では、桜十はなぜここに？」

「おれは老人と…まぁ育ての親なんだが、その人とこの山に住んでいてな」

「こんな山奥でご老人とですか？～」

「いや、老人ってのはその人の通称だよ」

「……老人が通称？」

「変わってるだろ、しかも見た目は二十代だ、まぁその人の遺言でな」

そうなんともいえない顔をする桜十

「遺言って」

「一年前にな」

「……すまぬ、桜十……」

「ん？」

「いや、……初対面なのにも関わらず色々失礼をしてしまって。更には育ての親のことを…」

「気にするな、まぁ本人は満足して逝ったんだ。それに今の時代、満足できずに死んでいく人間の方が多い。その中で満足して死ねるなんてある意味幸せだろう」

「たしかに、…つかぬことを聞くが、お主はこれからどうする？」

「このまま山を下りて出会った賊を潰しつつ、風の向くまま気の向くまま気まぐれに行く、だな」

「…そうか、…公孫賛殿の下で共に戦えればと思ったのだが……」

「今現在誰かの下で働く気はない、客将としてもな。ちなみにおれは気まぐれでな、まぁ悪癖なんだが。もしかすると次に会った諸侯に仕官するかもな」

「中々定まらんな……しかし、…共に戦えないのは残念だが仕方ないな…」

本当に心底残念そうな顔をする

「……桜十さんはなんでこの一年間下山しなかったんですか～？」

「……また人の身の上話を聞くか」

「差し支えなければ」

「まぁ良いが、……二人はこの外套をどう感じる」

桜十は羽織ったまま外套をヒラヒラする

「私にとっては邪魔だな」

「風も同感ですねぇ～」
「普通そう思うだろうな、……おれは一年間この白外套を羽織って戦っても何ら支障が無いように鍛錬してた」

「そうであったか……話がだいぶ逸れてしまったな」

「今更な気もするが……」

「まぁまぁ、…私達が来たのはこの山を住処にした黄巾賊の討伐と捕らわれた女性達と子供達の救出です」

「突っ込んで迷っては意味が無い、そのため待ち伏せしようとした時、お主が洞窟から出てきてな」

「捕らわれた奴らがいるとは知らなかったな。……捕らわれた女子供はおまえたちで保護しろ、今更おれが戻ったってしょうがない」

「では、この場でお別れですね～」

「あぁ、じゃあな」

それだけ言うと程立と趙雲に背を向けて手をヒラヒラして去ろうとする桜十

「待て、桜十」

「何だ?、趙雲」

去ろうとする桜十を呼び止めたのは趙雲、今の彼女は目をキリッとして武人の雰囲気を醸していた

「…桜十、私と刃を交えてはくれぬか…」

「ダメですよ〜、私達は捕らわれた人達を保護しにきたんですから」

「わかってる、…だが、武人として強者と闘いたいと思うのは当然。…桜十、無理を承知で頼む」

ジッと決闘を受けてくれるまで逃がさないとばかりに桜十を見据える趙雲

「…ま、良いだろう」

嬉しそうに笑顔になる趙雲、程立は諦めたように被害がこないよう

に安全な場所に立つ

「では、さっそく」

チャキ

槍を構える星

「ああ、来い」

スゥー…

腰から静かに右腕で‘秋水’を抜く桜十

「……構えないのか」

「これが、おれの構えだ」

今の桜十は秋水を持ったまま腕をぶら下げてる

「…あまりおちょくらないでもらおう」

「おちょくっちゃいねぇよ、構えなんて千差万別、さっさとかかってこい」

「…はぁっ！」

そう言われ、躊躇わずに桜十に突っ込む星

「ふっ！」

並の兵なら避けるのは難しい鋭い突きを放つが、桜十は左に避ける

「セイッ！」

「おっと」

「！」

しかし趙雲は見越していたように素早く桜十に槍を振り、桜十は手を使わず側転で避ける

思ってもみない奇妙な避け方に驚いて固まる趙雲

「……」

「っ　ぅ！！！」

宙に浮いた桜十とほんの一瞬目が合った途端、全身に寒気が走って本能的にしゃがむ、すると趙雲から何メートルも離れた後ろの木々が綺麗に斬れる

「……」

『なっ！？』

「……」

無言で着地する桜十と何メートル後ろの木が突然斬れたことに絶句する趙雲と程立

「背を向けるな」

「っ！」

突然の出来事に思わず桜十に背を向けて斬れた木々を見るが、声を掛けられて振り返ったが時すでに遅く、喉元に刃が添えられて槍を踏まれて動かせない

「おれの勝ちだな、趙雲」

「……私の負けだ…」

自分の勝ちだと宣言する桜十と負けたにも関わらず晴れやかな顔で潔く負けを認める趙雲

…

…

～趙雲～

「今回はおれの勝ちだ」

桜十が槍から足をどかして、刀を納める

「今回は……、まるで次があるような言い様だな…」

「闘志剥き出しでとぼけられてもな、……次会ったら今度こそ勝ってその面に書いてあるぜ」

「……」

桜十の言うとおり、確かに自分でも今までに無いくらい自分から湧いてくる闘志を感じるし、桜十と再戦したいという思うはある。私だけじゃない、桜十と刃を交えて生き残った武人は再戦を強く望むだろうな。何よりあれだけ力量の差があるんだ、落ち込んだり悔しがることは無い。むしろ目指す目標が定まって今までより鍛錬に打ち込める。……気になることが一つある、何故我らが闘ってる時に突然木が斬れた……やはり、桜十がやったのか……？

「さて行くか」

むっ、もう行くのか

「じゃあな、趙雲、程立」

「さよなら〜」

うむ、またいずれ……て、違う！

「桜十、待たれよ！、聞きたいことがある！」

「んん？」

「グゥゥ…」

そうウザそうな顔をしながら気のない返事をするな、桜十よ

「お主と私が闘ってる時に突然木々が斬れたろう、……あれはお主の仕業か？」

「？、妙なことを聞くな」

……惚けてはなさそうだな、……いかに強かろうと限度があるか
……

「いや、すまない。変なことを聞いてしまった。達者でな、いずれ
また会おう」

そのまま私達に背を向けて去る桜十

「星ちゃ～ん、早く行きましょ～」

おっと、だいぶ待たせてしまったな。今行くぞ

…

…

～桜十～

「大した洞察力だな、趙雲」

趙雲が言ったとおり、あの時趙雲の後ろの木々は確かにおれが斬った。趙雲がしゃがんで避けることは‘見聞色の覇気’で分かっていたから隙を生むためにあえて木々を斬ったが、まさかおれに背を向けるほど驚くとは思わなかった……老人の言ったとおり‘飛ぶ斬撃’の存在は世間に知られて無いらしい

飛ぶ斬撃は言わば‘斬れる風’だ。力量によって規模も威力も形も自由自在に変化できるが限界はある。だが‘武装色’を纏えば規模も威力も敵に目掛けて行く速度も何倍にも跳ね上がる

木々を斬った時はただ線の形を飛ぶ斬撃だ

特に誰かに師事して修得というわけじゃなく、刃物を振り続けてれば使えるようになる。そこから何時でも自由自在に扱えるようになれば超人だ

別に達人で‘気’を使えるなら簡単に出来るがな。……気を使えない身としては少し寂しいな……。まぁ気が使えないことが幸いなのか、ずっと怠けず鍛錬ができて、今じゃあ老人に勝るとも劣らない強さになったはずだ、おれは

さて…、身の上話はここまでにして……、これから先の時代の行く末を自分の目で見て自分の肌で感じる時だ！

おれの力を思う存分に振るえる時だ！！

プロローグ（後書き）

バトルウルフの鳴き声はどういうのだろう

トリコはアニメでしかわからないものでして

原作を見てる方は是非教えてください

たった一話ですが感想と指摘、お願いします

一話

～桜十視点～

「何とか落ち着いたな……」

疲れた様にドサッと座って腰の秋水と月詠を肩に掛ける桜十

「お疲れじゃなぁ、ほれ、お茶じゃ」

グッタリした桜十に苦笑いしながらお茶を出したのは町長の老爺だ

「あぁ、ありがとう、……しかし、二年も経ってないのに随分懐かしく感じるな…」

礼を言ってお茶を飲んで一息した後、感慨深そうに言いつつ不思議がる桜十

「そうじゃな、まぁワシからすればあっという間じゃ、……あれだけ小さかった桜十が今やこんなにもデカくて男前になるとはのぉ」

町長は桜十の隣に座って桜十の肩をポンポンと叩きながら感慨深げに頷く

下山してから半日、黄巾党や官軍と出くわすわけでもなく、桜十は自分と老人が唯一慣れ親しんでる町に寄っていて、何度か老人と来ていたことで手厚く歓迎された

久しぶりに来たことで、もみくちゃにされた桜十だが今は町長の家でノンビリしてる

桜十は老人がいないことに聞かれて、亡くなったことを伝えると、老人を知っている人間は悲しんだが誰も泣かなかった

「おれは剣士で剣を振るのは好きだが。平穏も良いな」

「昔は、…まぁ先々代の帝様の時代は泥棒や賊はいたが今ほどじゃなかった。…今の時代は私腹を肥やすばかりの権力者が蔓延ってて、ここ数年じゃあ黄巾党なる賊の集団が各地の街を襲っては焼き払ってるらしいし、同じ暴政で苦しんでる民に手を差し伸べるどころか男は殺して女子供は売るとは、…これじゃあ私腹を肥やす権力者共と同類じゃのぉ……」

力なくため息を吐く老爺

この老爺はかつて官軍の大将軍を務めるなど多大な武勲を残した知る人ぞ知る武人だ

そもそもこの町を創ったのは当時大将軍を引退した数年後の町長で、町民のほとんどは賊に襲われて生き延びた者や追い剥ぎにあった者や暴政に耐えきれず家族と共に着の身着のまま町を出て行き倒れて拾われた者がほとんどで、そういった人達を受け入れたり、夫婦になった男女が子供を産んでいく内にいつしか大きな町になっていった

当然大きな町なだけに偶々賊討伐を終えた官軍の目につき、その官軍が町に着いて早々、専横を振るおうとするが町長と偶々居合わせた老人の二人で残らず討伐したことで町にも町民にも被害は無く、都にも知られてないため今も町は平穏だ。これが老人とこの町との縁だ

「……最初は被害者の集団だったが、今となっちゃあただの賊の群れだな。ちょうど下山する際に山を住処にした黄巾党を殲滅してきたとこだ」

お茶をグイッと一気飲みして器を静かに置いて半日前のことを言う

「そうじゃったか、……どおりで……真新しい血の匂いがしたわけじゃな……」

眉をしかめながら桜十をジッと見る町長。桜十から血の匂いがするのは会った時からほぼ気づいていた

「……なぁ町長、これから先をアンタはどう見る」

桜十は今生きてる人間の中で最も長生きしてるであろう町長に尋ねる

「確実に言えるのはことは……、群雄割拠する時代を迎えるじゃろう」

「……」

「お主はこれからどうするんじゃ？」

目を閉じて腕を組んで胡座をかいてジッとする桜十に身の振り方を聞く町長

「……とりあえず風の向くまま気の向くままだな、序でに鉢合わせた黄巾党を殲滅だな」

「仕官せんのか？」

町長は口にこそ出さないがどこかの人格者に仕官してほしいと思ってる

「……極端な言い様だが仕官ってのは自分の一生を誰かのために使うんだろう……。誰かのために一生を使うなんてゴメンだな、仮にこれから先おれの存在が知れ渡って諸侯達から勧誘されても断るぜ。百歩譲って手を貸すか客将になるかだ」

「……自分勝手な奴じゃのう。じゃが…風の向くまま気の向くまま旅をするのは平和になってからでも遅くなかろう」

「……何処かの軍勢に組して群雄割拠を終わらせろって聞こえるな」

「…相も変わらず察しが良いのぉ」

自分の考えを察した桜十に笑みを浮かべ、そんな町長に呆れた様に溜め息を吐く桜十

「……何にせよ、あの老人から直にありとあらゆるモノを継承したお主が一度でも世に知れ渡れば凄いことになるじゃろうな」

「凄いことねぇ……」

これから先を悟ったのか、蓄えた髭を撫でながら意味深なことを言って面白そうに笑みを浮かべる町長

「と言っても、これから先のことはお主次第じゃよ」

「そりゃあそうだな」

「ところで、お主はいつ発つ？」

「急いでるわけじゃないが、明日にでも発つ」

「…忙しないのう……少しはゆっくりしていかんか…」

町長は桜十を孫の様に思っている。その孫が早々に街を発つことが寂しいのだ

「おれは平穏は好きだが、それ以上にジッとしてられる質じゃねえんでな。」

桜十がそう言うと秋水を抜刀して前に軽く一閃する。まるで早く存分に振るいたいといわんばかりに

「…残念じゃのぉ、しかし……お主、そこまで戦闘狂じゃったか？」

桜十の言葉に心底残念そうに肩を落とすが、最後に会った二年前とだいぶ違う言動にやや戸惑いを隠せずにいる町長

「……戦闘狂と言われても仕方ないが、…そんなに重傷じゃないぜ」

困った様に顔をヘラヘラさせる桜十

「…たしかに重傷ではないようじゃが、戦闘狂である内は街中でうっかり武器をとって民を怖がらせることがある。気をつけるのじゃぞ」

常人を呑み込むほどの威厳のある雰囲気を醸す町長

「……年寄りの、…経験豊富者の厳重注意は聞き入れよう」

姿勢を正して真面目に聞いて答える桜十

「……おお！、そうじゃ！、二年前にお主と老人がこの町を去って

数日後に少年がこの町にやってきての」

「はっ！？、この町にか！！」

町長と老人がこの町を腐った官軍から守って二十年以上、大陸中の官軍や諸侯から見つけられてないこの町に、自分達以外の人が来たことに驚きを隠せない桜十

「真紅という名で、何でも陳留の曹操の下で兵をやっていたそうじゃが酷い話での、…あらぬ罪を着せられて処刑寸前の所で逃げ出して、追っ手も何とか撒いて命からがらこの町まで逃げてきたんじゃよ。……あの時の傷だらけ様は痛々しかったのぉ」

その時のことが目に浮かんだのか顔を歪ませる町長

「私利私欲の連中が支配する国や領地ではありがちな話だが、曹操といえば今の時代では珍しく常に部下や兵、民を想う名君じゃなかったか？」

桜十はほとんど山籠もりをしていたため、詳しいことは分かってない

「曹操自身はそうなんじゃが本人曰く、犯人は自分が武勲を上げるのが気に入らん同僚や上司、らしい」

「同僚と上司がねぇ、……しかし…武勲を上げるってことはそれなりの強者らしいな」

「うむ、‘気’の使い手じゃ」

「へえ……」

やや驚く桜十。‘気’の存在は現役時代の町長が使って以降、世間に知られているが使える人間は限られていて、長期の鍛錬や経験があって初めて使える

その気を使えるのが少年だということに余計に驚いてる

「話は少々変わるが、この町がかつて官軍に襲われかけてそれを機にわしが自警団を作ったのは知っとるな？」

「知ってるも何も、町長が考えた‘六式’の幾つかを駆使する集団だろ、おれにも一つ教えてくれたじゃねぇか」

「真紅はその六式全てを体得し、果ては奥義も使える」「…たった二年で、……そりゃあまた、…凄まじい才能と努力の塊だな」

老人と町長が官軍を討って以来、いつまた何者かに襲われても大丈夫な様に町長が独自に編み出した‘六式’という体術を若い男女に教え込んだ

六式は‘指銃’‘嵐脚’‘鉄塊’‘剃’‘月歩’‘紙絵’という六つの技の総称で、六式を使う百人の男女の総称を自警団

技を修得できるのは基本的に三つで、それ以上もいるが全てを修得して且つ奥義も修得してるのは自警団の中では真紅だけだ。しかし使う機会が来ないため持て余してる状態だ

「この町の皆はこのまま百年に一人の逸材である真紅をこんな辺鄙な町に置いておくことは惜しいと思っておる」

「…要はおれが発つ時にそいつも連れて行けってか?。…おれは良いがそいつが頷くのか?」

桜十自身は武力においてどんなに弱い兵を雑魚や足手まといと思わず、より強くなれる部類の人間だと思ってる

「真紅はお主に興味を持っとる、…何より完璧に修得した六式を存分に使いたがっとる。案ずるな、お主と同様に自制できる」

「別に案じちゃあいないが、……とりあえず、会っておくか」

「それが一番じゃな」

このまま本人を交えないで町長と話しても平行線のままだと考えて、直接会うという桜十に頷く町長

町長は最初から桜十と真紅を会わせるつもりで真紅の話題を振って、あたかも本人（桜十）から真紅へ会いに行くという構図を作って見事成功した

「で、真紅とやらは今何処にいるんだ」

「今は修練所で……おお！、そうじゃ、忘れておったわ！」

「……会わねぇ内に耄碌したか、町長」

人をおちょくって楽しんでる様な笑みを浮かべる桜十

「黙らんか小童！！。……今から二日前に三人の女子がこの町に来たんじゃよ」

「…おいおい……この町が作られてから三十年、立て続けって程でもないが人が来るとはな。……なんかの前兆かねぇ」

「来たというより、行き倒れてた所を修練中に若い衆が見つけたんじゃ。その三人は義姉妹でその末っ子が大食らいでのぉ、前の町で大食らいの末っ子が食い過ぎて路銀が尽きたようじゃ」

桜十の言葉を無視して、前に聞いた行き倒れの原因を伝える

「どんな巨漢だ、てか路銀が無い状態で町を出るとは…」

呆れ顔の桜十

「まぁ路銀有る無い関係無くここに来るまで街は無かったようじゃ。ちなみに大食らいの末っ子は子供と変わらない体系じゃ」

「益々わからねぇって、……ちなみに、長女と次女はどうなんだ」

町長の大食らいの末っ子が子供と変わらない体系という言葉に疑問符を浮かべつつ他の長女と次女のことを聞く桜十

「長女はピンクの髪で巨乳で天然で、次女は長い黒髪で巨乳でしっかり者じゃな」

「……顔をニヤつかせながら特徴を言うな、クソジジイ」

顔をニヤつかせてる町長に青筋を浮かべる桜十

「そう怒るでない、……長女は劉備、次女は関羽、末っ子は張飛じゃ。此処に来たときに顔を見たと思うがのぉ……」

「もみくちゃにされてたからなぁ、知らん」

「そうじゃったな、今頃劉備は子供達と遊んで、関羽と張飛は修練所で真紅と闘っとるじゃろう」

「次女はともかく末っ子がか?、…普通長女だと思うが……」

「そう思うじゃろう……次女と末っ子は武術の心得があるのは見て分かったが、長女は剣こそ持っとるが実力は一般兵と同じ程度……」

「とことん凸凹してるな…。…長女はともかく決闘の方は面白そうだな。…見てくるか」

「……胸をか（ボソッ）」

「今の言葉を聞いて何故そう聞こえる！。てめぇと一緒にすんな！」

桜十は次女と末っ子と六式を極めた男の闘いに興味があり、その闘いを見てくるために立ち上がると町長の呟きが聞こえ、怒鳴る様にツッコミ、ズンズンと歩いて豪快に引き戸を開け、静かに閉めて町長の家から出て、修練場へ向かう

二話（前書き）

またしても色々と大幅に変えてしまいました

とりあえず白銀はいないことにしました

今更ながら作者は恋姫無双も三国志の知識もまったく無いのでおかしな点がかなりあります。宜しければ無知な作者にアドバイスをください

そして、作者の優柔不断さをお許しください

二話

〜?視点〜

これは桜十が町に来る一日前の光景だ

ここは尊厳な雰囲気を醸し出す森

その中を歩いてるのはピンク髪の少女劉備、黒髪の少女関羽、赤髪の幼女張飛。

三人の少女は姉妹の契りを交わして共に荒れた世を正そうと立ち上がった三姉妹だ

だが

「うぅ…お腹空いた……」

姉妹の長女、劉備が暗い顔をしてお腹を押さえながらウナダレて空腹を訴える

「…死にそうなのだ」

劉備と同じ状態の末っ子の張飛

「……桃香様、……お腹空いたと思うから空腹になるんです、空腹のことを考えてはダメです！。……それに鈴々！、お前はあれだけ食っておきながら！、…少しは我慢を覚えろ！」

劉備と張飛を毅然とした態度で叱咤するのは次女の関羽。長女と末っ子とは違ってしっかり者だが、それ故に心労が絶えなず、劉備と張飛は顔色が悪いが、関羽は二人以上に悪い

本来の予定では五日前に出た街から二日間かけて次の街に着くはずだったが、既に一年以上前に黄巾党に襲われて風化していた

それ以来街にまったく出くわせず、喉の渇きは川の水でどうにでも出来るが腹は満たせてない

兵糧を買い溜めできる分の路銀こそあるが街の中でしか使えないため意味がなく、兵糧は前の町で買い溜めしたが二日分だったため既に無く、喉を潤した川にも魚がいなくて、食べれるであろう動物とも出会わないために計三日間食べれてない

自分は武人だからとどんなに戒めても、育ち盛りで恋に焦がれる年頃の少女には二日間腹を満たせなくて風呂に入れないのは拷問だ

「……もう……歩けないのだ……」

「……私も」

そう言って、張飛は空腹で、劉備の脆い精神が風呂に入れず飯を食べれない二重苦を耐えられるはずも無く、ドサッと尻餅をつく張飛と劉備

「……《ドサッ》」

『愛紗(ちゃん)！？』

緊張が解れたように突然倒れた愛紗に空腹を忘れて駆け寄る二人

愛紗が倒れた原因は空腹と不眠、そして二人の我が儘を聞いてそれを内に溜め続けた結果、ストレスで心労の限界を越えて気を失ってしまった

不眠の原因は野宿をする際には必ず一人は見張りをしなくてはいけないが、碌に勉強せずに勢いで旅立った二人は知らずに寝てしまい、必然的に愛紗がすることになる

五日間ほとんど寝てないにも関わらず劉備と張飛を叱咤激励する愛紗は凄いと言える

「そ……そんな……あ、愛紗ちゃんが……」

「愛紗！、目を覚ますのだ！、死んじゃだめなのだ！！」

愛紗が倒れる数ある原因の一部を作ったのが自分達だと気づかず、愛紗が瀕死状態だと思い込んで涙目の二人

コントを思わせる光景だが三人共至って大真面目だ

「愛紗！、返事《ぐぅ～》うぅ……」

「鈴々ちゃっ！！？」

腹が鳴ったことで空腹を思い出してうずくまる張飛に寄るために立ち上がった瞬間急に足の力が抜けてドサッと横たわる劉備

二日間腹を満たせず、風呂に入れない二重苦で心身共に未熟な劉備は既に限界で、意識が朦朧とした状態だ

「っ……り……りん…りん……」

「お、おねえ……ちゃ……」

お互いに手を伸ばすが触れる寸前に同時にパタッと手を落としてそのまま気を失う

…

…

…

～町長～

ふ～む、今日も町も町民も元気で穏やかで何よりじゃ

「おはよう、町長」

「おはよう、真紅」

今、挨拶してきたつい一年前にこの町にやってきた青年、真紅じゃ。何でも陳留の所で兵をやっていたそうじゃが、上司が犯した犯罪を

着せられて逃亡して此処まで来たらしい、今の乱世ではありふれた話じゃが酷いもんじゃ

純粋じゃったんじゃろうな、信用していた上司に裏切られたことを引きずっていたのか最初は此処の町民を絶対に信じないと敵視しておったが、一年間町民の穏やかな心と触れ合っていく内にトゲが無くなっていった

今ではよく人をおちょくるのが好きな皮肉屋じゃが誰一人嫌な顔はせん、皆あれが真紅なりの心の開き方と思っておるからじゃ

ちなみに自警団の一員で史上初の六式を極めた少年で一番の強者なんじゃが、極めたのを機に自警団設立当初からいた団員を除いてほとんど団員が真紅と話さなくなってしまった

別に嫌がらせでもイジメでもなく、団員達は六式の一つを修得するだけでどれだけ大変なのかは知っておる、……故に僅か数年足らずで六式を極めた真紅に対して強い憧憬や羨望を抱いてしまった

———ちょう

話しかけるのが恐れ多いと言ったところじゃろうな

———ょうちょう

真紅自身はどうってことないと言っていたが果たして、……どうにかならんもんか

「町長！！」

おぉ！、いかんいかん、考えに耽ってたわ。すまんな真紅

「遂にボケが起きたのかと思ったよ」

失礼な奴じゃ、…ところで、どうしたんじゃ？

「別に、いたから挨拶しただけだよ。それに……アンタや団員達が言っていた男のことでね」

…そうじゃ……桜十は老人と同じで人を惹きつける何かを持っとる…その何かを持つあやつなら「町長！」――――いかん、またやってしもうたわ

「…アンタ、……やっぱりボケたでしょ」

ボケとらん、少し考えに耽ってただけじゃ

「耽ってる時点で十分ボケの始まりだよ」

こやつは……まぁ良い。それより桜十がどうしたんじゃ？、言う途中じゃったろう、言ってみい

「ある意味、話の腰を折った本人がよく言うよ。……まぁ良いや、……これからその桜十って男の所に行こうと思うんだけど」

……まったく、もう少しくらい待たんか

こやつに桜十のことを話したら、興味あるのか珍しく黙って聞いておったが、今では闘いたがっとる

「アンタ達から聞いて一年ちょっと。いい加減我慢出来ないんだけど」

……体をほんの微かに振るわせとる。……困ったのぉ、このまま此方から出向いても碌なことにならん、……どうにか足止め出来んもの「町長！、真紅！」……今声を掛けてきたのは自警団の古参の一人で主に女子に体術を教えとる女師範、四式使いで真紅と普通に話す数少ない者なんじゃが、……どういうわけか六式の幾つかを修得して以降老いとらん

「どうしたのさ、師範」

「事後報告だけど、この町の近くの森の中で三人の女の子達を保護したわ」

『――――！！』

真紅が驚いとる、かく言うワシも驚いとるんじゃが……

「……たった三人で旅に出るとはね、武芸に自信でもあるのかな」

「三人はそれぞれ薙刀と剣と矛を持ってたわ。旅人であることや武芸に自信があるのは確かね」

「しかし、……何故‘保護’なんじゃ？」

まずはそこじゃ、その子らの道中にわざわざ此処まで案内したなら保護じゃなくて連れてきたじゃろう

「……倒れてたところを私達が見つけて負ぶってこの町まで連れて来たから保護と言ったんですよ。それくらい察してください」

おぉ！、そういうことじゃったか、…して、その子らは何故倒れてたんじゃ？

「さぁ、それは本人達に聞いてくださいな。私も修練場に戻りますので」

では、と言って剃で行ってしもうたわ。……何じゃ、教えてくれても良いだろうに。……仕方ない、会いに行くかのぉ……真紅、共に行くぞ

「何で僕が…アンタ一人で言ってきなよ」

お主以来の外から来た人間でしかも女子じゃ、興味ないのか？

「桜十って奴以外誰が来たって僕には興味ないよ」

まったく、冷めた奴じゃ。……ほれ！、行くぞ

「っ…わかったよ、一緒に行けば良いんだろ！」

ワシが強引に背を押すと諦めた様に女師範の家に向かう真紅

うむ、女子達と言っておったから恐らく真紅と同年代、…気が会うやもしれんからな。……さて、ワシも行くか

…

…

…

『……』

《ガツガツガツガツ》

来てみたは良いが……凄まじい食欲じゃな。特に赤髪の小さい女子は猛獣の様に食い散らかして、ピンク髪と黒髪の女子は赤髪の女子と違って丁寧に食べてるが口に運ぶ食べ物の量が普通の二倍はある

倒れてたと言っておったが、……もしや

「ねぇ町長、もしかしてこいつら、…行き倒れ……」

……間違いなくそうじゃろうな。しかし、……あの赤髪の女子のあれは流石に異常じゃな、……幾ら腹減ってるとはいえ……

ワシらはこのまま黙って見ているしかできなかった

…

…

～第三者～

「……ぷはっ、食った食ったなのだ！」

「はぁぁ〜〜、お腹一杯！」

「ふぅ……むっ……アナタは……？」

張飛と劉備は満腹になって満足げな笑顔を浮かべ、関羽は満足そうに息を吐くと近くにいた町長に気づいて何者かと問う

「ワシはこの町の長のじゃ」

町長がそう言うと三人は慌てて立ち上がる

「ちょ、町長さんでしたか！！、あ、挨拶もせずに、し、失礼しました！。私は劉備、字はげ、玄徳です！」

「私は関羽、字は雲長と申します」

「鈴々は張飛なのだ！」

劉備はしどろもどろに、関羽はピンと立ちながら、張飛は元気よく名乗る

「うむ、よろしくな。……つかぬことを聞くが……お主らは、……姉妹か？」

町長は疑問符を浮かべながら尋ねる。何せ色々な意味で違いがありすぎるために尋ねずにはいられなかった

「鈴々達は血は繋がってないけど姉妹の杯を交わして姉妹になったのだ！」

えへん、といった感じで自慢げに胸を張る張飛。元々孤児で友達はいたが家族がいなかっただけに一気に二人の姉が出来て嬉しいのだ

「そうじゃったか、妙なことを聞いてしまったのぉ。……ほれ、お主も名乗らんか」

町長は後ろにいる真紅に名乗れと言う

つられて三人も見る。すると関羽と張飛が眉をしかめる

「（この男、…できる…）」

「（にゃー、このお兄ちゃん凄く強いのだ）」

「……真紅」

腕を組んでそっぽ抜いたままチラッと三人を見て名乗ると、また目をそらす

そんな真紅の態度に劉備は自分達は何か気分を害してしまったのかと戸惑い、関羽はさっきとは違う意味で眉をしかめ、張飛は疑問符を浮かべる

「…すまんのぉ、こういう奴なんじゃ」

「そ、そうですか」

自分達が気分を害したんじゃないと知り、ホッとする劉備

「町長殿、この町は……」

「そうじゃな、説明しよう――――――」

内容は前話を参照してください

「――――というわけじゃ」

『……』

「へぇぇ～～！、おじいちゃんそんなに凄い人だったのだ！」

張飛は町長がかつて大将軍を務めてたことに、劉備は目の前の老爺がかつて多大な功績を残して今や伝説と語り継がれて色々な書物に載ってる張本人だということ、関羽は劉備と同様の理由と一目見て強い思っていたが、目の前の老爺がまさか武人達の間でも最強と称されてる武術、六式の祖で大陸全土の武人が目標としてる武人だということに驚いてるがそれ以上にこの老爺ならと納得してる

「此処はこれといったモノは何も無いがゆっくりしていきなさい」

「お、お待ちを町長殿！」

立ち去ろうとする町長と真紅を待ったをかけ、町長は止まるが真紅は何処かへ行ってしまった

「……聞かないのですか？、私達が倒れていた原因を……」

「ほっほっほ、あれだけ食欲旺盛な場面を見れば一目瞭然じゃよ」

『っ！！！』

自分達が倒れてた原因を尋ねてこないことを不審に思って逆に尋ねるが、既にバレていたこととそれを決定付ける場面を見られて首から上全体を真っ赤にする劉備と関羽と疑問符を浮かべて首を傾げる張飛

そんな三姉妹を微笑ましいといった感じで眺める町長

「ほっほっほ、…落ち着いたら、町を散策してみなさい」

「分かったのだ、ありがとうなのだ！、おじいちゃん！」

『……』

散策してみろと言うと背を向けて手を軽く振って去る町長

そんな町長に大声でお礼をして大きく手を振る張飛と顔を真っ赤にしたまま呆然としてる劉備と関羽

…

…

〜関羽視点〜

くっ……醜態を晒してしまった……しかも伝説の武人に見られるとは。……

私達は町長殿に言われた通り散策した

その道中、大丈夫か、元気になったか、旅は大変だろ、など笑顔で労いの声を掛けてくれて、気づけば体に溜まっていた疲労が消えていた

町民達曰く、外からこの町に人が来たのは二年ぶりらしい……たしかに、ここら辺は人がとても寄りつける場所じゃない

前の風化した街以降、笑顔を見せなかった桃香様と鈴々も今は笑顔で子供達と広場で遊んでる

桃香様の理想はみんなが笑顔でいられる世界、この町はそんな理想を体現してるな

……町長殿に聞けば、何か教えて頂けるだろうか……ダメもとでも聞くか、もしかすると教えてくれるかもしれん

「あれ？、どうしたの、愛紗ちゃん？」

私が町長殿の家へ向かうために立ち上がると桃香様が気づいて尋ねてくる

…町長殿にお尋ねしたいことがあるので、彼の所に行こうかと思いまして……桃香様は子供達と遊んでいてください

「？、どうし「桃香お姉ちゃん、遊ぼー！」わっ！」

問いつめられそうになったが、一人の子供が引っ張って行った

さて、行くか

三話（前書き）

読んでくださってる方々、だいぶ遅れてすみません

変わらず駄文ですが、寛大な心で読んでいただければ幸いです

三話

〜〜

町長の所に行くと言っても場所が分からないため、町民から教えてもらい、関羽は今は町長の家の引き戸の前に立っていた

「町長殿、……お話したいことが……」

コンコンと木の引き戸をノックして神妙な声で言う関羽

「その声は、関羽じゃな。入りなさい」

町長は直ぐに関羽と気づいて、少し間を空けたあと家に入れと言い関羽は入る許可をもらって入ると、胡座をかいて腕を組んで、目をやや鋭くして神妙な面もちの町長がいた

そんな町長と目を合わせた瞬間鳥肌が立った

嫌悪感からではなく、まるで自分が此処に来た理由を最初から見抜かれたと感じ、これが最強の武人なのかと少し感動していた

町長は既に三姉妹の大概のところを把握してる

こんな乱世に美女がたった三人で旅をすればどうなるか分かる、それを知らずに旅をするほど三人は馬鹿じゃない。それを知った上で旅をして且つ三人を把握してる者なら動機と方法が見える

動機は賊と腐敗した権力者が蔓延る世を正し、誰もが笑顔でいられる平和な世を作る

そんな甘っちょろい理想が民が今最も求めてることだが、それに同意しても付き合う君主はいない、そのため必然的に自分達が旗揚げするしかない

三姉妹が旗揚げすれば姉妹の長女である劉備が長になる

恐らく、三姉妹が掲げる大義名分を体現してる町の長である自分に訪ねてくるだろうと読んでいた

「関羽よ、ワシに何か用か？」

「突然押しかけてすみません。……あなたにお聞きしたいことがあります」

剣呑というほどではないがそれに似た雰囲気を醸して町長を見据える関羽

顔にも雰囲気にも変化はないがやっぱり、と心の中で溜め息する町長

「……長話じゃな、……座って待ってなさい。今茶を出そう」

「恐れ入ります……」

関羽は立ったまま一礼して、薙刀を右側に置いて座る

数分後、熱い茶を持ってきて関羽と自分の前に置いて座り、ほぼ同時に啜る

「……此処の町民はみんな穏やかで笑顔ですね」

茶飲み器を静かに置いて、散策して思ったことを口にする

「うむ、町民達はこの町を好いとる、この町また町民を好いとる」

町民達の中にはワシと真紅も含まれてるぞ、と付け加えて茶を啜る

「……単刀直入でお聞きします、なぜ「町民達の誰もが晴れやか笑顔をしてるのか、じゃろ？」……はい…」

関羽が何故こんな考えを持ったのか、それは旅に出て以降、ほとんどの街が街の長の圧政や黄巾党が何時か攻めて来るんじゃないかという状況なためやせ細った顔や怯えた顔をした人など、中には人格

者が治める街は民達は笑顔だがそうでない者もいた

そんなことが長々と続いて自分達の理想は実現不可能なのかと思い始めた時に行き倒れ、町民に拾われ、町民と接していく内に自分達の理想は実現可能なのだと再認識し、自分達の理想を体現したこの町の長に聞けば何かヒントが得られると思った……しかし

「答えは簡単じゃ、…誰も欲張らず、満足しとるからじゃよ」

「……」

予想外な返事に呆気にとられる関羽。大いに期待していただけに尚更だ

「数時間前に、此処の町民は皆賊の脅威や官軍の専横に耐えきれず逃げ出した者達で構成されとると話したろう……」

「はい、……ですが……私の聞きたいことどう関係が……」

「彼らが何よりも望んでるのは自分達の安穏、それを得たからじゃ」

町長は茶を啜って一息つく、関羽は納得出来てないのか不満げな顔

だ。その様子に苦笑する町長

「納得出来てないようじゃな」

「当たり前です……私が聞きたい「町の外は荒れてるのにこの町は穏やかなのか」そうです！。もったいぶらないでください！」

焦らされたことで憤慨して身を乗り出す関羽をドウドウと落ち着かせる町長

「それはこの町……と言うよりこの辺一帯に秘密がある……口外しなければ教えよう」

「……外に知られて困ることがあると？」

先ほど同じ予想外な言葉だが、先ほどとは違って疑問符を浮かべる関羽

「大ありじゃ、無きゃそんなこと言わん」

口ではそう言ってるが関羽は約束を破る様な性格じゃないと見抜いていたが、町長自身は流石に三十年近く俗世から離れていたため、

自分の体が衰えたように人を見る目も衰えたと思っていて自信が無かった、そのためそう問わずにはいられなかった

実際は体こそ衰えてるが人を見る目までは衰えてないが

「……聞かせてください」

「……言いじゃろう」

とその前にと何時の間にか無くなっていた茶のおかわりをするために立ち上がって台所まで行き、茶を注いで戻ってきた

「さて…幾つかあるが、……一つはこの町には金という概念が無い」

「なっ！」

関羽、というより町外の人間にとってお金は生きていく上で、物を買う上では必要不可欠な物だ。

だがこの町にはその概念すら存在しないという、町外の人間にとっては絶対にありえないことだ。

「なっ、なぜ……」

「普通は不可欠なモノじゃが、それを必要としない理由がある。……それが絶対に町外に口外してはいかんことじゃ……少なくとも、平和になるまではな。……改めて聞こう……お主は、口外せんことを約束するか？」

常人なら腰を抜かす気迫を剥き出しにして、再度問い掛ける。

「っ！！、……えぇ…約束します…！」

町長の気迫に冷や汗をかいて怯えた表情をするが、直ぐに負けじとキッとした表情をしながら軽く頷く関羽。

「ふむ、……この町を中心に辺り一帯は…特異なんじゃよ」

「特異……？」

怪訝な表情をする関羽。特異と言われても、言われた通りこの町を散策し尽くしたがと別段特異な場所やモノは無かった

特異と言えるかは微妙だがそれに似た光景があった。それは兵がいなかったことだ。いくら二十年以上誰にも気づかれてないとはいえ、兵がいないのはありえない

関羽は姉と妹と共に幾つもの街を巡ったが暴君だろうと名君だろうと必ず兵が巡回する場面を見ていた

余談だが、暴君の街の巡回してる兵が三姉妹を見つけると無理矢理連れて行こうとする。関羽はこのまま連れてかれれば確実に自分達は慰み者になると気づき、応援を呼ばれたらマズいと考えた関羽は有無言わずその兵を気絶させ、足早に去った。

話を戻そう……

「……この辺りは常に豊作なんじゃよ。種を植えるだけで後は放っておいて、早くて四十八時間で農作物ができる」

「っ！？」

本来農作物はあらゆる気候を経て豊作か不作か決まるモノだが、それらの常識を壊す町長の言葉に大層驚く関羽

「思い出してみい、農作物が売買される所を見たか？」

「……」

言われてみればたしかに無かったと思う関羽

「四十八時間経つ毎に新しい農作物が大量にできる。大量にできたなら独占せず町民全員で平等に分け合えば良いだけ、金を払う必要は無いじゃろ。今昔老若男女関係なく足腰の悪い者は青少年や中年や元気な年寄りが身を粉にして耕して収穫して食べさせる、当然自分達の分も耕して収穫して食べる。今までも、そしてこれからもそうしてこの町は成り立つんじゃよ」

「……そういう意味か」

町長から町の秘密を教わり、言いたいことを察した関羽

「この町の存在が知れ渡れば放っとく者はいまい、官軍だろうと賊だろうと来られたら町から平穏が無くなってしまう」

「……」

賊は言わずもがな旅に出る前は知らなかった官軍の悪い所を知った関羽は、もしこの町が知れ渡れば黄巾党や腐敗した一部の官軍に辺り一帯や町民が蹂躙される光景が脳内に浮かんで顔を歪ませる。

「分かったじゃろう……この辺りが特異で安定してるからこそ皆が

笑顔なんじゃ。……誰もが笑顔でいられる世界を作る……
それが劉備の旅をした理由であり野望、これから主らが築く義勇軍が掲げる大義名分じゃな？、……関羽よ」

「！！！」

まさか此処に来た目的はおろか自分と張飛の姉であり主君の劉備の考えを見抜かれていたことに思わず凄い勢いで顔を上げる。
よほど驚いたのだろう、関羽の顔は驚愕に染まり切ってる

「図星のようじゃな……まぁ良い」

それ以上何を言わない。町長は尋ねられたら答える、わざわざ自分から言うこともないと思って、ズズッと茶を啜って静かに待つ

……数分後

「何故……分かったんですか……」

「む？」

「…劉玄徳が望むことを……我らのこれから先のことを……」

「お主らを知る者ならおのずとわかる。ワシからは何も言わん、年寄りが若人の進む道を口では言っても心から言ってはいかんじゃろう…」

「そう……ん？」

喋ろうとした時、静かだった外からガヤガヤと騒がしい声が聞こえ、不思議がる

「帰って来たようじゃな」

「？、どういうことですか？」

誰が帰って来たんだという意味を含んで問う関羽

「行けばわかる……ほれ、行くぞ」

立ち上がってさっさと家を出る町長

関羽も慌てて薙刀を持って追いかける

…

…

町長と関羽が家を出ると、散策した時にはいなかった数多くの中年の男女と若い男女いた

三姉妹が散策した時は昼で穏やか雰囲気を醸していたが、今は夜でその時間には相応しくないくらい町民と見覚えのない者達がワイワイと楽しそうに話してる

「これは……」

「愛紗ちゃーん！」

見覚えのない者達と昼の時に会った町民が楽しそうに話してる光景に呆然としてる関羽に姉と妹が駆け寄ってくる。

「桃香様、鈴々……この者達は？」

「この町の人達を守る人達なんだって」

「それにみんな強いのだ！」

劉備は関羽の質問に答え、興奮しながら付け足す張飛。

張飛は外見こそ幼女だが武人だ。それだけに強者を見ると興奮する。

人の本心こそ見抜けないが、武術が強いかそうでないかは見抜ける張飛。

「なるほど……確かに、……いずれも強者……」

劉備の説明と張飛の言葉に頷く。

自警団の中には関羽や張飛より強い者が多い、それだけに張飛だけでなく関羽も心中は興奮してる

「あら、元気になったのね」

「え？、…えーっと……あなたは…？」

そんな三人に近づいてきたのは行き倒れてる三人を見つけて拾った女師範だ。

しかし三人にとっては見覚えのない女性だ、そんな人に声を掛けられれば戸惑う。

「あぁ、気絶していたし、起きる前に修練場に戻ったから顔を合わせてなかったわね…」

「ニャッ?、気絶?。なにを言ってるのだお姉ちゃん」

「失礼ですが、お会いしましたか……?」

「何を言っておる、彼女は他ならぬお主らを拾ってこの町まで連れて来た命の恩人じゃぞ」

知らなかったとはいえ自分達を拾い、此処まで連れて来て飯を食べさせてくれた命の恩人に対して失言ってほどではないが何者かと尋ねてしまい、劉備と関羽と張飛は顔を引きつかせる

「ご、ごめんなさい!、命の恩人さんだと知らずに…!」

「ふふっ、別に気にしてないわ、劉備ちゃん。あなた達は私の顔を見なかったのだから仕方ないわ」

分からなかったら怪訝な顔をするか顔を怒りに染めるかだが、理由を理解してる彼女は顔色一つ変えてない

仮に彼女自身、というより町民達は顔を覚えられてなくても、それで腹を立てるほど小さくなく、むしろ話のネタにして笑い話にする

女師範の言葉を最後に沈黙が走る。数秒後何かを探してるかのように辺りを見渡す女師範に訝る三姉妹

「……町長、真紅君に何処に？」

「あ奴なら黄巾討伐に向かった」

「そうですか…、なら良かった」

心底安心したような顔をする女師範。真紅はいつも自警団が修練から帰ってくるところを陰ながら見ていて、それに女師範を含む師範達と熟練な団員達は気づいていた。

普段は帰って来て真紅の気配を感じるが今日は欠片も感じない、それで気づいてる者達が戸惑い、中には街を去ってしまったのかと不安がる者もいた。女師範もその中の一人だ。

「黄巾党って、…大丈夫なんですか？、お二方。」

「心配いらん、あ奴は自警団最強じゃ」

「あなたに最強と言わせるとは……その自警団とは……？」

興味深そうに尋ねる関羽。昼頃真紅を見た時かなりの強者だと分かったが、伝説の武人に最強と言わせるほどの強者だということで、興味が湧いてきてのだ。

「自警団とは、六式を使う者達の総称じゃ」

『っ！！！！』

劉備は両手を口に当てて、関羽は目をギョロッとするほど見開いて驚く。

二人は事細かに勉強したわけじゃないが、目の前の老爺が最強の武人と謳われる最大の理由が六式だとは知っている。

町長の最高の武勲は攻め寄せてくる五胡の軍勢一万人を単身で葬ったこと、その際に用いられたのが六式。

その存在が明るみになって以降、修得しようと数多くの弟子入り志願者がおり、それに叶った者達はひたすら修練に励んだが誰一人修得できず、更に無茶が祟ってほとんどの人間が体を壊してしまった。

それ以降、使い手の町長は最強の武人、六式は最強人外武術と畏敬の念が込められて謳われている。

劉備と関羽はそれが理由で驚いてる。ちなみに張飛はわかっていない。

「お主らは何をそんなに驚いているんじゃ？」

「だっ……だって、六式ですよ！」

「六式の使い手がこれほどまでにいるとは……！！」

「言い方を間違えたのぉ、知っとるかどうかは知らんが六式は六つの技の総称で三つの技を使える者を三式使い、四つは四式使いと分けられとる」

「ちなみに自警団の団員全員が二式以上よ」

私は四式だけど、と付け足す女師範。

町長の説明と女師範の付け足しに劉備と関羽は驚きつつ何度も頷く。

「当時の弟子入り志願者は全員がお坊ちゃまなんじゃよ。まぁ邪心を持つ者ばかりでの、それ以前に生まれてから鍛錬はおろか重い物すら持ったことが無い者達が修得できないのは自明の理じゃ」

当時のことを思い出して顔を歪ませる町長。何せ自分達が体を壊したのは自分のせいだと何癖つけられて、都から追い出されかけたのだから

大将軍の立場に居続けた町長に我慢しきれず、権力を使って強引に追い出そうとした。

所詮は生まれで人を判断し続けて、相手が大将軍であれ生まれは自分達が上だから自分達の方が偉いと決めつけて権力を使った。権力的に下の者達が上の者に対して権力を使って追い出そうとした、……それは当然都中で知れ渡り、都中に知れ渡れば帝の耳にも入る。その結果町長を追い出そうとした者達が逆に追い出されたのだ。

―――話を戻そう

「……もしや真紅殿は……六式使い」

昼の時に真紅と会い、その時に真紅から感じ取れた強者の気迫、そして町長の口から自警団最強という言葉。これらで自ずと答えが出

てくる

「その通り、しかも「勝手にベラベラ喋らないで貰えるかな」あら、真紅君」

女師範が何か言おうとすると、突然人が……真紅が空から降ってきて、突然の出来事に関羽と張飛は咄嗟に武器を構え、劉備は尻餅をつき、町長と女師範は平然としてる。真紅が唐突にやってくるのはよくあることだからだ。

当の真紅は不機嫌そうに顔を歪ませてる。

「ごめんなさいね、真紅君。本来なら私達も行きたかったのだけど…」

「別にいいよ、あんたも他の師範達も団員達も修練で疲れてるんでしょ。…それより、こんな奴らに僕の話をしないでくれるかな…」

ジロッと五人を見る真紅。こんな奴らという言葉に関羽と張飛が顔をしかめる

「あら、別に良いじゃない。減るものじゃないでしょう」

「減る減らないの話はしてないよ、僕は…」

「そんなに神経質だと背が伸びないわよ」

「……」

自分の気にしてることを引き合いに出されて微かに体が揺れ、女師範を睨む。当の女師範は飄々として真紅を見つめる。

すると諦めたように目を伏せて溜め息を吐く。数秒後、突然関羽と張飛を見据える。

「……どうかしたか、真紅殿」

「関羽と張飛って言ったっけ?、あんた達」

「……それがどうしたのだ……」

未だ顔をしかめてる関羽と張飛。真紅の先ほどのこんな奴らという言葉をまだ根に持ってるらしい

「明日、僕と戦わない?」

『！！』

顔をしかめてる関羽と張飛も真紅の言葉で一気に驚きつつ嬉しそうな顔をする。驚きは自分達が望んでいたことがこうもあっさり叶うことに、嬉しさは関羽は六式使いと戦えるということで、張飛は単純に戦えることにだ。

「……決闘を受けず武人は名乗れない……その申し出を受けよう！」

「鈴々も受けるのだ！！」

二人の言葉にフッと笑うと、何も言わず町長の家に入る真紅を黙って見送る五人。

「良いの？、関羽ちゃん、張飛ちゃん」

「受けなくては武人の名折れ！」

「そうなのだ！、鈴々達の力を見せてやるのだ！」

関羽は凛と立ち、張飛は欲しいものを買ってもらう子供の様にウキウキしてる

「そう……劉備ちゃん、関羽ちゃん、張飛ちゃん、今日は家で食べていって」

「えっ!?、良いんですか!」

「ええ、一人より四人で食べた方が美味しいじゃない」

「なら早く行くのだ!」

待ちきれないのか女師範の手を引っ張って走り出す張飛と笑顔で二人を追いかける劉備と姉と妹の姿を見て苦笑いしながら小走りで後を追う関羽。

四人の姿を見届けると、自分の家に入る町長

時間が経てば立ち話をしてる者が一人、また一人と家に入っていき、また更に騒がしくなるが、こちらも時間が経てば徐々に静かになっていき、そして遂に町から音が消えた

……

……

……昼間

三姉妹、というより関羽と張飛は決闘のために真紅を迎えに向かったが、修練の時にと言われ、今は散策しつつ劉備と関羽は昨日話せねかった団員達と話し、張飛は子供達と遊んでる。

すると一人の町民が町の出入り口から走ってきた。

「おぉ～い！、オウトオが来たぞ～！」

「何！、本当か！？」

「早く行かないと！」

「にいちゃんとあそぼー！」

「ずるい！、わたしもあそぶー！」

走ってきた町民が逆走すると、劉備と関羽と話していた町民達、張飛と遊んでる子供達も走って行ってしまい、訳が分からない三人はポカーンと突っ立ていた。

「……オウトウ？」

「……いや、オウトオですよ、桃香様……」

我に戻った劉備がボケにも似た言葉を発して、それにツッコム関羽。

「……よくわからないけど、……とりあえず見に行くのだ！」

いつの間にか近くにいた張飛が二人を見て言う。

「そう…だね……」

「百聞は一見に如かず、だな」

三人はタタタッと町民達が走って行った方向、出入り口に走って行った。

「ニャー、これじゃあオウドウって人が見れないのだ」

「す、凄いね。…て、鈴々ちゃん、オウドウさんじゃなくてオウトウさんだよ」

「オウトウではなくオウトオですよ、桃香様。……しかし、なんという人だかり」

気になって来てみたは良いが町民でごった返していて、更に真ん中に居るであろう目当ての人物も子供に引っ付かれていてほとんど見えない。

張飛はぴょんぴょんと何度も跳ぶが子供の体系なだけに意味はない。

「へぇ、あいつが」

『っ！！！』

三人はどうにかできないかと思案中してると、突然後ろから声が聞こえ、体をビクッと震わす。

「し、真紅さん！、脅かさないでください！」

後ろにいる真紅に訴える劉備。よほどびっくりしたのだろう、少し涙目だ。

「別に脅かしてないだろう」

「考えてる最中にいきなり後ろから声が聞こえたら驚くに決まってるだろう！！」

薙刀を地面に突いて怒鳴る関羽。張飛も身構えて猛獣の様に唸ってるが、どうでもいいといった感じの真紅。

「町の中で良かったね、……町の外だったらグッサリだよ」

真紅に正論を突きつけられ、言い返せないのか誤魔化す様に俯く三

人。

そんなやりとりをしてる間に当の人物は子供を引っ付かせたまま何処かに行った。当然目当ての人物がいなくなれば町民達も散り散りになる。

「……あ、あれ?、オウトウさんは……」

人がゾロゾロと散り散りになっていくことに気づいて、出入り口の方を見るが目当ての人物が居ないことで呟く。

「オウトウ?、オウトオでしょ。そいつなら子供を引っ付かせたまま何処かに行ったよ」

「……また取り残されてしまった」

一度目とほぼ同じ展開に肩をガックリ落とす三人。そんな傷心の三人と真紅に。

「……傷心してるとこ悪いけど、今から修練場に『行くぞ（行くのだ）！！』……」

絶句する真紅。言い切る前に即答されたことと、修練場という言葉

に張飛はともかく、関羽も釣れるとは思わなかったため絶句してる。
関羽は意外と単純なんだなと内心で思う真紅。

「早く行くのだ！」

「あぁ、ついてきな」

張飛に急かされ、真紅は背を向けて修練場がある場所に向かい、その真紅の後を追う三人。

そして……

ここは町から五百メートル離れた修練場……。

修練場は現実で言うならば東京ドームの三倍の広さで形はほぼ四角形だ。

周りには自警団の面々が興味深そうに見て、劉備は見守り、師範達は何時でも止められる様に構えてる。

「来な……」

グローブを嵌めてパンッ！と手のひらと拳を合わせる真紅。

「先ずは鈴々が相手するのだ！」

自分の背丈の二倍はある矛を軽々と振り回して切っ先を真紅に向ける

「……二人で掛かって来なよ」

「むっ！、鈴々をナメてるのか！？」

真紅の言葉に自分が見くびられてると思って憤る鈴々。

「別にナメちゃいないよ、僕は同じ力量の二人と同時に戦いだけさ」

町の人達はほとんどの言葉を受け流せる。そんな町で暮らしていたためか、どんなことを言ったら人を怒らせてしまうのかということを忘れてしまってる真紅

「〜〜〜〜！！、もう怒ったのだ！！、ボッコボコにしてやるのだ！！」

うりゃぁーー！！、と叫んで真紅に目掛けて突っ込む張飛。

その姿に何を思ったのか一瞬ほくそ笑む真紅。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

三話（後書き）

碌に考えず勢いで書いたものなので後付けや矛盾が多いかと思いますがご容赦を……

単純な剣術で二年後のゾロとＦａｔｅのセイバーってどっちが強いんだろうか……世界観も設定も根本的に違う以上比べようがないんですけど……

まぁ個人的にはゾロに一票……

因みに何をくだらないことを考えてるんだというツッコミは無しで……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9148x/

真・恋姫†無双

2011年11月30日12時58分発行